

# 西表島に関する覚書

今 林 直 樹

## はじめに

「西表島」と書いて「イリオモテジマ」と読む。このエキゾティックな響きを持つ西表島は、八重山諸島で最も大きな面積を持つ島であり、近代以降、様々な学問分野から関心を持たれてきた。例えば、民俗学の分野では、西表島祖納と星立地区に残る節祭や古見地区に残るアカマタ・クロマタ（但し、こちらは門外不出の秘祭として島外の者は観ることができないので、その内容は具体的にはまったく不明である）などである。歴史学の分野では、祖納地区に残る大竹祖納堂儀佐にまつわる史実や史跡、あるいは一五〇〇年の石垣島で発生したオヤケ・アカハチの乱に際して王府側に参戦し、乱後、王府から「西表首里大屋子」に任じられた慶来慶田城用緒に始まる錦芳氏慶来慶田城一族の歴史などである。地理学では亜熱帯原生林に覆われた自然環境、あるいは浦内川や仲間川の河口付近から広がるマングローブ林などといった自然環境に関心が持たれ、そして生物学では、言うまでもなく「イリオモテヤマネコ」に注目が集まった。

本稿は、このように様々な学問分野で注目される西表島に関する考察を進めていく中で、必要と思われる事柄について

「覚書」として整理したものである。

以下、本稿では、主として、歴史と文化に焦点をしばってまとめていきたい。

## 一．歴史

### (一) 大竹祖納堂儀佐

大竹祖納堂儀佐は、十四〜十五世紀頃に実在したとされる歴史上の人物である。その実像については必ずしもはっきりとはしていないが、残された文献史料や民話、伝説などを補助資料として大竹祖納堂儀佐についてまとめたのが、「西表をほりおこす会」の石垣金星氏である。氏は『西表民謡誌と土工四』（二〇〇六年）の中で大竹祖納堂儀佐について次の三点にまとめている。すなわち、「大竹祖納堂儀佐時代の西表島」、「祖納に伝わる大竹祖納堂儀佐の伝承」、そして「鍛冶神であった大竹祖納堂儀佐」である。

第一に、「大竹祖納堂儀佐時代の西表島」である。

大竹祖納堂儀佐に関する文献史料としては、氏も紹介しているように、『琉球国由来記』巻二十一「八重山島嶽嶽名并同由来」があり、同『由来記』に「ヲハタケ根所」として記されている。その全文は次のとおりである。

ヲハタケ根所 神名 ナシ 西表村

トノ神名 ヲタイガネマセド神

右由来ハ、上代、当島西表村、祖納堂ト云フ人アリ。其高

六尺余高ニシテ、勇力人ニ勝タル人ニテ、ヲハタケト云所ニ家ヲ作り居ケル。或時、晴天ニ、森ニ登リ四方ノ景氣ヲ見渡スニ、西ノ方ニ島蔭幽ニ相見得ケレバ、兵船用意ニテ、勇力ノ者、数十人相語ヒ、順風ニ帆ヲ揚ゲ、与那国島ニ渡リ、相戦ヒ討勝、島ノ酋長ノ者二三人生捕リ、降参サセ、後ニ悪鬼納ガナシ御手ニ入ケル時、其由奉奏タル由、申伝也。依之、与那国船当島往還ノ時ハ、西表島ニ潮掛リイタシ、彼ノヲハタケ家ノ火神ヲ拜ミ申事、今迄有来ル也。

この由来によると、大竹祖納堂儀佐は与那国島に攻め入り、勝利を得て同島を支配し、後に琉球王府に同島を差し出したことになっている。大竹祖納堂儀佐と与那国島の関係について、石垣氏は、琉球王国時代に公用の与那国船が与那国島と西表島祖納を往復し、祖納におけるその指定港が「ユヌンフチ」であつたと指摘している。「ユヌン」とは「与那国島」のことであり、「フチ」は「港口」のことで、「ユヌンフチ」とは「与那国口」を意味するのだそうである。この「ユヌンフチ」は通称で、当時の西表島番所（現公民館敷地）の前「ニシドン」に入り込んだ港のことを指すという。このことから、氏は西表島と与那国島との間には長い交流の歴史があると指摘している。

第二に、「祖納に伝わる大竹祖納堂儀佐の伝承」である。

これに続けて石垣氏は「祖納に伝わる大竹祖納堂儀佐の伝承」と題して、大竹祖納堂儀佐と与那国島の関係について、大

竹祖納堂儀佐の子孫である大竹八重雄氏と『西表島の民俗』の著者である星勲氏から聞いた話として、概略次のような話を紹介している。

大竹祖納堂儀佐にはブナリ（姉）がいた。ブナリは、ある日、大竹が、夜中、寝静まった頃になるといなくなり、朝方に戻ってくることに気づいた。寝床は潮水で濡れており、大竹は船に乗ってどこかに行っているのであつた。

その後、大竹から「毎晩与那国島に行っている」と打ち明けられ、それ以後、ブナリは大竹の航海安全を祈るようになった。

その後、大竹勢が与那国勢に勝利して島を支配したが、敗れた与那国島の亡霊が復讐のために悪霊と化し、チコホウ（リュウキュウコノハズク）に乗り移って西表島をめざし、崎山の近くにあつた「ピサトゥ村」を祖納村と思ひ込んで同村を全滅させてしまった。

石垣氏は、大竹祖納堂儀佐が西表島と与那国島を往復したことが事実であつたことを前提に、その理由が「与那国攻めの事前調査であつた」としている。

なお、上記のエピソードには、大竹祖納堂儀佐の姉であるブナリが与那国島へと向かう大竹の航海安全を祈願したことに加えて、与那国島征服後に「悪霊の復讐」に備えて日夜祈願を怠らなかつたこと、そして実際に悪霊と化した与那国島の亡霊た

ちが外離島付近で暴風に襲われて南へと押しやられ、やっと西表島のヌバン崎（崎山）に上陸できたことが記されている。石垣氏は記していないが、ここにはいわゆる「ヨナリ神」信仰が反映していることを見て取ることができることを指摘しておきたい。

第三に、「鍛冶神であった大竹祖納堂儀佐」である。石垣氏は大竹祖納堂儀佐が「鍛冶をする人物であった」と指摘している。というのは、大竹祖納堂儀佐を祀っている「大竹御嶽」から鍛冶の後に出る「鉄鐸」が大量に出土したからである。石垣氏は、大竹祖納堂儀佐の子孫である大竹八重雄氏の協力を得て、鉄を産出しない西表島でどこから鉄の原料を持ち込んできたのかについて、新日本製鉄八幡／たたら研究会の大沢正巳氏に分析を依頼した。その結果、大竹鍛冶遺跡の鉄の原料が中国産（揚子江沿岸）である可能性が指摘されたのである。この結果を受けて、石垣氏は、大竹祖納堂儀佐が中国大陸方面との交易のルートによって鉄の原材料を輸入し、鍛冶をしていたことが推測できるとしている。さらに、氏は、台湾の淡水に膨大な鍛冶遺跡のあることが報告されたことを受けて、それとの関連についても調査を進めている。

そして、石垣氏が注目しているのが与那国島の鍛冶遺跡「ドゥナンバル遺跡」（与那国島空港敷地内）である。同遺跡は時代的にも西表島の鍛冶遺跡とほぼ同時代であり、大竹鍛冶遺跡の羽口とよく似た特徴があることなどが共通しているという。しかし、与那国島もまた鉄を産出する島ではない。石垣氏も指

摘しているように、竹富島には根原金殿という鍛冶神がおり、やはり与那国島支配に関するエピソードを残している。では、なぜ与那国島であったのか。この点について、石垣氏は、与那国島が当時の世界帝国であった中国に最も近く、「豊かな物資」を入手しやすいという地の利を得ていたことに注目する。

石垣氏は、与那国島が台湾に隣接した島であり、島伝いに中国大陸の資源運び込む極めて重要な中継基地として、民間貿易によって盛んに利用されたとしても不思議ではないとする。これこそが、大竹祖納堂儀佐にとって「与那国島の最大の魅力であった」と推測するのである。そして、西表島と与那国島との間で起こった争いは鉄の原材料の獲得を巡るトラブルがこじれた結果であると推測している。

なお、西表島だけではなく、八重山諸島をはじめ、宮古諸島にも「鍛冶」や「鉄器伝来」の伝承を持つ島々がある。例えば、八重山諸島では石垣島の大浜村の「崎原御嶽」、宮古諸島では宮古島にある「船立御嶽」や同島狩俣地区に残る「鉄器伝来」伝承である。しかし、これらに残る「鍛冶伝承」「鉄器伝来」によれば、鍛冶技術や鉄器はすべて東から渡ってきた人々によってもたらされている。崎原御嶽では薩摩から、船立御嶽にまつわる伝承では、久米島から鉄器が伝来したことになっている。また、狩俣地区への鉄器伝来は、海を距てた東正面にある大神島に東から渡ってきた人々が狩俣地区に渡って伝えたことになっている。さらに、石垣氏が紹介している竹富島の「根原金殿」は、上勢戸亨の記すところによれば屋久島出身であ

り、もう一人、鉄器との関連は記されていないが、「金殿」の名を持つ久間原発金殿は沖繩出身である。このように考えると、鍛冶技術と鉄器については、基本的には東から西へと伝来していることがわかれるが、大竹祖納堂儀佐と与那国島との関係はむしろ逆であり、石垣氏の考察にしたがうならば、西（中国大陸、台湾）から東（与那国島、西表島）へと伝来しているとも解釈されるのである。ここは「どちらか一方が正しい」と考えるのではなく、東アジア世界全体が鉄器の時代を進展させ、鍛冶技術や鉄器が人々の交流の中で普及していったと大づかみに理解しておきたい。

以上、石垣金星氏の著作をもとに、大竹祖納堂儀佐について整理してきた。石垣氏は、大竹祖納堂儀佐に関する文字史料が限られている中で、民話や伝承、あるいは鍛冶遺跡などの発掘調査やその結果などを駆使して、大竹祖納堂儀佐の実像に迫り、西表島を取り巻く国際環境にまで考察を進めた。得がたい業績である。

## （二）慶来慶田城用緒

十五世紀末、八重山諸島では政治勢力が台頭し、群雄割拠の時代を迎えた。具体的には、石垣島では石垣地区の長田大翁主、平久保地区の平久保加那按司、川平地区の仲間満慶山英極、大浜地区のオヤケ・アカハチ、波照間島では明宇底獅子嘉殿、与那国島ではサカイ・イソバ、そして西表島の慶来慶田城用緒が挙げられる。慶来慶田城家については、『慶来慶田城由

来記』が残っており、初代慶来慶田城用緒から十代用州に至るまでの慶来慶田城家の記録が記されている。筆者はかつてこの『由来記』をもとに慶来慶田城用緒についてまとめたことがあり、本稿では、重複するところもあるが、それに基づいて、あらためて慶来慶田城用緒についてまとめておきたい。

『由来記』によれば、慶来慶田城用緒は外離島の野底辻に居所を置いた有力者の一人で、一五〇〇年に石垣島で勃発したオヤケ・アカハチの乱で琉球王府側に与し、その功績により、乱後、王府から「西表首里大屋子」という役名を授けられ、錦芳氏の祖となった。

『由来記』に記された慶来慶田城用緒に関する記事において、重要なのは次の三点である。

第一に、慶来慶田城用緒が平久保加那按司を討ち果たしたことである。平久保地区を支配していたとされる平久保加那按司は領民に対して威勢を振るい、暴政をもつてのぞんでいた。慶来慶田城用緒が平久保加那按司を訪ねた際、冷たくあしらわれたことで立腹し、平久保加那按司の暴政に不満を持つ領民の協力を得て、平久保加那按司とその妻子を討ち果たしたという。平久保加那按司については、彼が登場する文献がこの『由来記』のみであるため、その実在性については必ずしもはっきりしているわけではないが、群雄割拠時代における諸勢力間の抗争の一端をうかがうことができるエピソードである。

第二に、慶来慶田城用緒が平久保加那按司を討ち果たした後、石垣地区の長田大翁主を訪ね、長田との間に兄弟の契りを



結んだことである。長田大翁主は、平久保加那按司とは違い、「西表島に慶来慶田城」という人物がいることを聞き及んでおり、会いたいと思っていた」と語り、慶来慶田城用緒を丁重にもてなした。そして、三日間、長田の下に滞在した後、慶来慶田城用緒は長田と兄弟の契りを結ぶことになるのである。宮古島の例になるが、宮古島で政治勢力が台頭し、群雄割拠の時代を迎えた十四世紀末から十六世紀の初頭、按司や殿を名乗る有力者たちが抗争を繰り返す中で「七兄弟」と呼ばれる一種の同盟が結ばれて、敵対する勢力に対抗していた。慶来慶田城と長田の「兄弟の契り」もまた一種の同盟であったであろう。これは後のオヤケ・アカハチの乱で機能することになる。

第三に、オヤケ・アカハチの乱後、宮古島の勢力が八重山諸島に及んでいることである。同時期、宮古島では仲宗根豊見親が台頭していた。仲宗根はアカハチの乱に際して、アカハチとの間に「離島連合」の結成を模索していたといわれるがかなわず、王府に与してアカハチの乱の鎮圧に大きな功績を残した。王府からその功績を讃えられて「忠導氏」を賜わり、宮古頭職の地位を得た。『由来記』によれば、第二代用庶の代に、宮古島の豊見親が八重山諸島を支配していたことが記されており、豊見親がなくなつたという知らせを受けてアヤグを歌い、酒を飲んで大いに喜んだとあるので、その支配が厳しいものであったことが推測されている。ちなみに、オヤケ・アカハチの乱が勃発したとき、琉球王国は第二尚氏王統第三代国王尚真の時代であった。全盛期とも言われるこの尚真の治世に宮古島をはじ

め八重山諸島の島々もまた実質的に琉球王国の統治を受けることになるのである。事実、先の仲宗根豊見親は与那国島の鬼虎を討っており、王府の支配は八重山諸島全体に及んでいったのである。

なお、『慶来慶田城由来記』には、上記の他に、「阿蘭陀船」の漂着、造船とすらの由来、さらには簡潔にはあるが、一七七一年に発生した、いわゆる「明和の大津波」に関する記事も記されており、文献史料が少ない中で、西表島を中心とする当時の八重山諸島に関する貴重な情報源となっている。

## 二. 文化

### (一) 西表祖納と星立(干立)の節祭

西表島には祖納、星立(干立)と船浮に節祭(シチ)と呼ばれる祭祀があり、一九九一年には国の重要無形文化財に指定されている。比嘉康雄によれば、この節祭が行われている祖納と星立(干立)との関係については「祖納が星立(干立)の親村」と言われており、実際に歴史的な分村関係はないようであるが、もともと節祭(シチ)は親村の祖納ではじめられ、星立(干立)はそれに倣つたとも言われているという(以下、とくにことわりがない限り、説明等は比嘉康雄、『神々の古層』<sup>⑨</sup> 世を漕ぎ寄せる「シチ・西表島」、ニライ社、一九九一年からの引用である) こうした背景があることもあり、本節ではとくに祖納と干立の節祭について紹介したい。

比嘉は、節祭について「旧暦八、九月のつちのと亥の日をシ

チと定め、三日間にわたって、独特な芸能を伴っておこなわれるムラ最大の祭」で、「内容は年の節目に当り、海の彼方から五穀豊穡のウシマユ、ミリクユを迎え豊年とムラ人の健康を願う」祭りであると記している。『琉球国由来記』巻二十一「年中祭(祀之事)」には「七・八月中ニ己亥日、節ノ事」とあり、その由来を「年婦シトテ家中掃除、家・蔵・辻迄改メ、諸道具至迄洗拵、皆々年繩ヲ引キ、三日遊ビ申也」と記している。三日間にわたる節祭の初日をとくに「シチ」というが、比嘉によれば、その内容は「身を清め、家を清め、ムラを清め、翌日、新しいユ(幸い)を迎える」というものであり、『由来記』の記述はこのことを指していることがわかる。

なお、二日目が「ユークイ(世乞い)」と呼ばれるものであり、その内容は「前泊浜のフナムトゥ(舟元)という祭場に、ウガンの神々、ミリク神を侍らせ、海の彼方からユ(幸い)を船で漕ぎ寄せ、その喜びを数々の芸能を演じて祝う」というものである。ここで、比嘉がまとめた「シチ(ユークイ)の行事日程表」を見ておきたい。

## 集合

ドウラの合図で、公民館に全員それぞれの役の扮装で集合

ミリクおこし ミリク役の者が、ミリクの面を着装し、ミリクに変身、ひととおりミリク舞いをし、トゥムらがミリク節をうたう

## 入場(行列、演技)

1 一番旗(ガヒヤ頭) 出発。舟頭、旗ふり、公民館長も一緒である。旗は前泊浜に立てる

2 二番旗(シバガキ)を先頭にミリクのグループから全員 出発

3 ピョーシ(ヤフヌ手)

4 ミリク、アンガマの行列。フナムトゥ(舟元)に納まる

## フナムトゥの行事(棧敷席)

あいさつ 主催者、来賓らのあいさつ

ミリクの舞 ミリクの舞いが、全参加者のミリク節合唱でおこなわれ、チカ、チヂビなどの接待がある

## ユークイ(舟クイ)

1 フナムトゥ(棧敷)の前に漕ぎ手たちが整列。総責任による抽選があり、紅白の別が決められる

2 一回目 ゆっくりした漕ぎをしながら、歌がうたわれ、競争に入る

3 二回目 競争。棧敷にかけ上がり、チカから盃を受ける。前乗りはパチカイの口上をのべる

## 浜での芸能

1 アンガマ踊り

2 狂言

3 棒芸

4 獅子舞い

5 男のアンガマ踊り

退場

入場と同じ隊列で、祭場の南側からムラの中道を通り、公民館へ退場

チカ、チヂビはフナムトゥウ（棧敷）の儀式でアンガマの歌をうたい、同所で解散

解散

ミリク納め ミリクの面をはずし、ミリクの役のあいさつがある

酒宴 ブガリノウシ（疲れ直し）の酒宴が解散場所の公民館にておこなわれる

上記「行事日程」に登場する、いくつかの役について触れておきたい。

第一に、「ミリク」である。これは八重山諸島を中心に見られる「弥勒信仰」に基づく来訪神であり、「ミルク」とも呼ばれる。『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館）によると、ミリクは「弥勒世界報」（ミルクユガフ）という豊年をもたらす存在で、布袋のような面相の面を付け、浅黄の袖の長く垂れた打掛に大帯を締めたゆったりした服装で、左手に杖を持ち、右手に持つ軍

配を振りながら、ミルクファ（弥勒子）と呼ぶ五尺の鉢巻きをした多くの子どもを従えながら現れるのが一般的である。ミリクは49歳の男性が役を務めることになっており、いったんミリクに変身すると、食事も用をたすこともできないということである。ミリク行列において、ミリクは行列の先頭に立ち、左右に袖持ちに添われながら、左手で杖をつき右手に太陽をデザインしたヒョータン形のうちわを大きくゆつくり振りながら、「ミリク節」で行進する。

第二に、アンガマ行列とアンガマ踊りに登場する二名の「フダチミ」である。石垣博孝によれば、フダチミは慶来慶田城用緒の孫娘を指しているという。その娘は西表島に漂着した若者と恋をし、諸々のものを投げ打って一緒に島を出たが、数年後に島に戻り、その際に島民に教えたのがアンガマ踊りであるという。アンガマ行列において、二名のフダチミは先頭に立ち、進行方向に向かって右のフダチミには「スズリプタ持ち」、左のフダチミには「飾りピン持ち」が付き従い、その後にはそれぞれ五名のアンガマと一名のニートウイ（音取）が付き従って、「与那覇節」で行進する。アンガマ踊りは、浜に立てられた旗頭のまわりに二重円の演形がつくられて、その中心の内円にフダチミとニートウイが2名ずつ位置取り、外円にはアンガーが並んで歌い、踊る。歌は「今日ヌフクラシャ（舟元の歌）」「五尺手拭」「ググハ（鳥羽）」「船」の四曲である。

しかし、フダチミで最も目を引くのがその姿である。フダチミはクバ笠をかぶり、その上から黒朝衣（クルチョー）を被つ

て全身を覆い、右手に扇子を閉じて持つており、その姿は実に謎めいている。このフダチミの衣装については、伊波悦子が「節祭の衣装考」で、古いクルチヨは公民館に保管してあり、「琉装で仕立てられ布巾いっぱい使われている。それはすっぽり被るためであろう。襟もいっぱい使い耳もそのままである。そしてトンボの羽のように透けるほどよく織られているのである」と記している。仮面をかぶるのではなく、顔までも隠して、全身がクルチヨで包まれてしまうために、見た目に異様な感じを与える。なぜ、このような衣装になっているのか、まったく謎である。

なお、星立（干立）の節祭については、内容としては祖納のものと同じであるが、フダチミが登場しないことと、オホホと呼ばれる道化が登場するのが大きな相違であると言える。石垣博孝によれば、オホホは「オホホホ」と裏声を発しながら、ミルク（ミリク）の行列にちよっかいを出すのが、相手にされない。更にオホホホを連発し、膝をがくがく震わせながら、誰れ彼れかまわず近寄っていくが、やはり無視される。ついには行列の行方を寂しくみつめて、ほう然と佇み、背中の風呂敷包みをおろして拳をかため、ぎくしゃくとした踊りを行なう。舞い終ると再び包みをかっいで去っていく。こちらにも正体が不明で、その存在自体が謎めいている。哀愁あるいは悲しみを漂わせてはいるが、その反面、「オホホホ」という裏声で発せられる叫び声など、不気味さも感じさせるものがある。このオホホが、なぜ、星立（干立）の節祭に登場するのか、換言すれば、

なぜ、祖納のものには登場しないのか、興味が持たれる。それは、星立（干立）の節祭に、なぜ、フダチミが登場しないのかという問題意識にもつながる。

## （二）アカマタ・クロマタ

冒頭に記したとおり、この秘祭については祭自体が島外の人びとには決して観ることのできないものであるため、本稿でも記すことはできない。但し、仙台出身で、一八九八年から一九三二年までの長きに亘って石垣島測候所に勤務した岩崎卓爾が、その著『ひるぎの一片』に「あかまた祭ニ就テノ私見」という短い文章を残しているので、それを参照していただきたい。

## おわりに

以上、西表島について、歴史と文化に焦点をあててまとめた。しかし、歴史と文化といえども、これでそのすべてが語られたわけではないし、明らかになっているわけでもない。冒頭に記したとおり、民俗学や地理学、生物学など、まだまださまざまな学問領域で考察すべき課題は残っている。今後の研究のさらなる進展に期待したい。

## 参考文献

石垣博孝、「西表祖納のシイチイ（節祭）」、『八重山文化』第二号、一九七四年。



石垣博孝、「西表千立村のシイチイ（節祭）」、『琉大史学』第八号、一九七六年。

岩崎卓爾、『岩崎卓爾一卷全集』、伝統と現代社、一九七四年。

沖縄県立博物館編、『西表島総合調査報告書』、二〇〇一年。

なお、右記『報告書』に「西表島の遺跡」（大城慧）、「船浮湾の戦争遺跡」（大城将保）、「西表島祖納・星立の節祭」（當間一郎）、「西表島におけるカキイ（魚垣）について」（仲底善章）、「節祭の衣装考」（伊波悦子）が所収されている。すべてを本文中に記すことはできなかったが、いずれも興味深い貴重な論考である。

那根武、『国選択無形民俗文化財記録作成西表島祖納星立の節祭の芸能』、西表民俗芸能保存会〈那根武〉、一九七九年。

比嘉康雄、『神々の古層』⑨ 世を漕ぎ寄せる「シチ・西表島」、ニライ社、一九九一年。

星勲、『西表島のむかし話』、ひるぎ社、一九八〇年。

『地域と文化 沖縄をみなおすために』、第四〇・四十一合併号、一九八七年。